

なかやま探訪

中山町郷土研究会報

令和五年五月号 No.九一

古代出羽国郡郷名『最上』

を記す墨書土器の謎に迫る



山口博之・須賀井明子 2004 による

現在、中山町長崎文新田の服部文右衛門家所蔵資料の中に須恵器杯の底部中央に合文字で「最上」とその右側の体部に「八十」と記された墨書土器がある。「八十」は「奉」一文字、または何らかの記号と考えられ「最上」の後から書き加えたと見られる。

この墨書土器は平安時代前期（九世紀）に作られたものと推定される完形品で出羽国最上郡（郷）に關係する大変貴重な考古資料である。

この土器の出土地等由来は全く不明であるが文新田の東から南側にかけて須川沿いに位置する中野目Ⅰ・Ⅱ遺跡、川前2遺跡・達磨寺遺跡では近年発掘調査が行われており、この墨書土器と同時期の遺構や遺物がいくつも見つかっており、文新田の近辺から

出土した可能性が高い。

現在は「最上」といえば新庄市を中心とした山形県の最北地域であるが、古代から近世初頭までは山形市を中心とする地域であった。

最上は「続日本紀」を初め八世紀から文献に登場する古代出羽国の地名である。和銅五年（七二二）割陸奥国最上・置賜二郡、隸出羽国焉。平城宮跡から出土した木簡には「裳上郡」と記され秋田城跡から出土した木簡には「最上郡」と記されている。

今回の「最上」と記された墨書土器は最上郡あるいは最上郷に關連する官衙で使用された遺物である可能性がある。

山口博之氏によれば十二世紀以前には、中山町から天童市寺津周辺に出羽国府が移動した「可能性」があるという。

古代末から中世初頭の出羽国府の所在がどこであるか諸説あるが「最上川」を詠み込んだ和歌と和歌を解説する「歌学書」から出羽国府は十二世紀代には最上川の河岸にあったとされることなどから最上郡へと移転した可能性を指摘している。

今後の考古学的な調査研究と文献史料の再検討による研究の進展を期待してやまない。

引用文献（山口博之・須賀井明子二〇〇四「古代出羽国郡郷名『最上』を記す墨書土器」『山形考古第7巻第4号』）

（文責 本会編集部）

● 行事案内

・ 2023 柏倉九左衛門家 紅花まつり（七月一日～二日）



日本遺産

最新情報は
公式HP



なかやま探訪

中山町郷土研究会

令和五年七月号 No.九二

江戸時代の農学者大蔵永常が高く

評価した「出羽流紅花の作り方」

江戸時代の後期、現在の中山町域は紅花生産が盛んで村山地方の中でも最大級の紅花生産地であった。



江戸時代の著名な農学者で当時唯一の農業ジャーナリストとも言われる大蔵永常(ながつね)が文政十三年(一八三〇)に著した「農稼業事」は全国の篤農家を訪れて、商品作物についてその栽培、経営、技術、農業精神などを聞き書きして編集した実施指導書である。その中で「出羽流紅花の作り方」として寛政五年(一七九三)に長崎村百姓代弥右衛門が当時の柴橋代官所(当時の代官は池田仙九郎但季(ただすえ)に提出した「弥右衛門書上文書」をそのまま引用して紹介している。

池田代官は柴橋代官を二回通算約三十二年間勤めており、その間、大坂代官、五條代官を勤め、五條では大蔵永常の『老農茶話』の出版を支援している。

出羽流紅花の作り方「紅花蒔付より摘入までの事」には次の内容が書かれている。

。種子の準備。畑の肥培管理。播種。間引。摘み方。花摘の目安◎摘み花の処理。干花製法。花餅の作成。種子から油を搾る。紅染木綿。うこん色。紅染。とれた紅の保存方法等

大変詳しい内容で全国の紅花産地を歩いた中でもこの秋葉弥右衛門の栽培法が最も優れていると評価している。

最上紅花の生産技術だけでなく紅花種子から食用油を搾油すること、間引きしたものは野菜になること、黄色染料の利用にも触れており現在のSDGsや第6次産業化にもつながるもので江戸時代後期の紅花栽培に関する全国有数の好資料である。

柏倉九左衛門家の紅花栽培は、明治九年(一八七六)で途絶えていたが、十六代当主柏倉桂子さんと青木邦明さん(当会顧問)らの尽力により平成二十五年(二〇一三)に一三七年ぶりに復活した。

ちょうど十年目の今年も連作障害を防ぐため先の「農稼業事」には書かれていない「換地法」の知恵と工夫を受け継いだNPO法人黒堀の里山保存会の方々の尽力により美しい紅花畑をみる事ができた。感謝。

今年七月一日(土)二日(日)に開催された「2023 柏倉九左衛門家紅花まつり」の際は、紅花は三分咲きほどであったが、いわゆる「半夏一ツ咲き」咲き始めの状態で「奥の細道」の尾花沢の条に出てくる芭蕉の句『まゆはきを佛(おもかげ)にして紅粉(べに)の花』を想わせる風情がある観光スポットであった。是非紅花栽培を継続していただきたい。(文責 本会編集部)

引用・参考文献

大木彬(1984)「農稼業事」と「弥右衛門書上文書」『中山町史資料編第七』所収

渡辺信(2003)「第五章第一節商品作物の発達と流通」『紅花』『中山町史中巻近世編』

所収

奈良県五條市史及び広報五條

特別寄稿

ふるさと中山町の史跡 (第十三回)
滝経塚出土の経文と経筒

中山町郷土研究会 安彦 政信

昭和五十二年九月中山町土橋字滝地内の豊田山の東側の峰から土砂採取中、平安時代末と推定される経塚(きょうづか)遺物、経文(きょうもん)(二十三巻と銅鑄製経筒(きょうづつ)の上部、外容器の甕(かめ)の破片、四耳壺(しじこ)の一部が発見されました。(下図参照)

経文は幅十八センチ、長さ五十七センチの紙本経で形式は卷子本(かんすほん)を体裁として、およそ八百年間土中にあったため皆棒状に固着していました。一部確認の結果、朱書の「法華経」の経文が埋められていました。

山形県内では、唯一埋納された経巻の一部が残っていました。大変貴重な文化財です。銅鑄製経筒は宝珠(ほうじゆ)型の被せ蓋を伴う上部しかありませんでした。

外容器の甕と伴出した四耳壺は、経筒と出土想定図のように埋められていたと考えられます。

また、壺と甕は、珠洲焼(すずやき)(石川県能登半島)と類似していることから「珠洲系陶器」と呼ばれてお

り、十二世紀中葉から十五世紀ころまで使用されています。経塚の甕や壺は特別注文物と考えられており、平安時代末(十二世紀)に山形盆地を一望に見渡せる「滝地内」の峰を選び埋納されたものと思われる。

経塚とは、法華経などの経典を書写し、これを容器(経筒)に収めて地中に埋納した塚のことです。

経塚の造営は、平安時代後期に末法の世が訪れるという末法思想が広がる中で経典を後世に伝えようと始まりました。

経典を弥勒菩薩(みろくほさつ)が世に現れるまで保存しようという意図から起こったタイムカプセルでもありません。

滝経塚の場所は昔から「経塚」と呼ばれており、江戸時代享保二十年(一七三五年)の土橋玉昌寺の古文書に記されており、文化二年(一八〇五)玉昌寺住持雪山老人が月山権現之の由来の板額に「村の戌亥の方に当たり小峰あり、経塚と名づく」と

記しています。

白鷹丘陵の周辺には多くの経塚があり、中山町の南部にあたる山辺町普廣寺山・同安国寺裏山・北部にあたる寒河江市平塩・同高瀬山の山頂など山形盆地を望む景勝の地に営まれています。

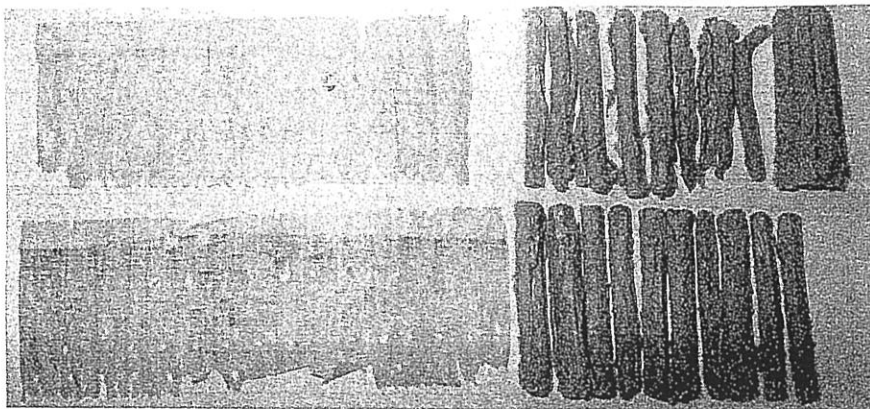
寒河江市平塩経塚からは康治(こうじ)(一一四二年)一一四四年)の紀年銘のある八角石製品が出土しています。滝経塚出土の経巻(文)について今後修復と読誦等の調査が実施され「法華経」以外の経典や写経の時期や関係者が解明されることを期待しております。

現在、これらの考古資料は、中山町立歴史民俗資料館に常設展示されており、機会があれば是非ご覧いただきたいと思ひます。

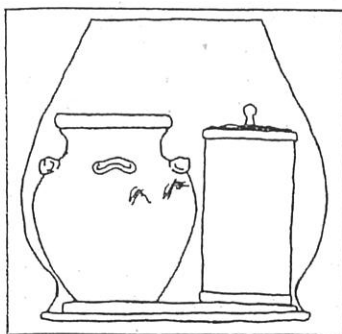
引用・参考文献
○中山町史上巻 中山町(一九九一)
第四章中世のあけぼの中山町

第一節 仏教思想の発展

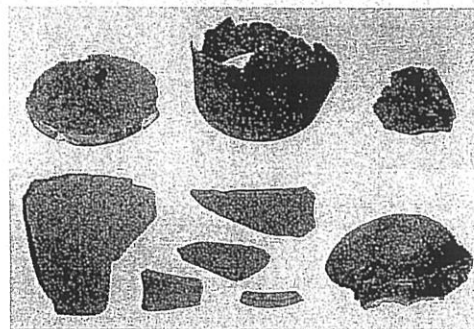
○山辺町史上巻 山辺町(二〇〇四)
第五章第四節 中世の信仰と白鷹丘陵



滝経塚出土の経文(巻)(中山町立歴史民俗資料館蔵)



経文の入った経筒出土想定図



滝経塚出土遺物